

春日若宮おん祭と舞楽

笠置侃一

(社団法人南都楽所楽頭)

奈良の春日大社では毎年12月17日に春日大社の摂社である若宮神社で「おん祭」がとりおこなわれます。この「おん祭」は保延2年(1136)に、関白藤原忠通公が五穀豊穰、国民安寧を祈願し、大和一国をあげて執行したのが始まりとされ、今年で863年の伝統があります。祭礼は7月1日より始まり、種々の儀式が次々と重ねられてゆきますが、その最高潮が12月17日で、この日は若宮神がお出ましになります。17日が始まる夜中の午前零時に境内の明かりがすべて消され、若宮神は清浄な袖を手にした神人の群れに囲まれて、お旅所へと向かわれるのです。

お旅所に安置された若宮神の前で午後二時半から祭典が奉仕され、夕刻には庭火の焚かれる神垣の中で、シルクロードを通じて渡来した舞楽や、平安朝より伝わる八乙女の神楽、和舞、少年たちの東遊、神功皇后にまつわる珍しい細男、華麗な田楽、さらにこの祭りの中で生まれ、世界最高の芸術と高められた能などが滞ることなく奉納されます。そして、午後11時頃になると庭火が一斉に消されて闇夜に白煙が立ちのぼり、ご神体は神人たちに守られて再び元の道を三蓋の山に戻って行かれます。

春日の杜で毎年繰り返されるこれらの神事芸能は、国の重要無形民俗文化財に指定されていますが、この若宮祭は若宮にふさわしく、児(童子)や巫女(御子)の奉仕が多いと言えます。たとえば、稚児の祭りといわれる「頭屋の稚児とうやのちご」、「日使ひのつかい」、「十列児とうつらのちご」などです。

それでは、舞楽について少し詳しく述べることにしましょう。

舞楽は、飛鳥・白鳳から奈良時代にかけて古代朝鮮や中国大陸から伝えられ、わが国において大成されたもので、後に日本で作られたものも含めて、その伝来や特徴から左舞と右舞に分けられています。左舞は中国や印度支那方面から伝えられたもので、赤色系統の装束を着け、右舞は朝鮮地方や渤海国などから伝えられたもので、緑色を基調とした装束で舞われ、左舞は唐楽、右舞は高麗楽とも呼ばれます。演奏は普通、左舞・右舞を一对(番舞という)とし、その何組かが舞われるのが例となっています。春日若宮おん祭に奉納される十三曲の舞楽は、性格からみて次のように分けることができます。まず、春日祭や葵祭など純粹

に神道の祭典に奉納されるわが国固有の歌舞としての「東遊 あずまあそび」と「和舞 やまとまい」です。

次に「振鉦 えんぶ」に続く二番の舞楽、つまり「萬歳楽 まんざいらく・延喜楽 えんぎらく」と「賀殿 かてん・地久 ちきゅう」です。これらの舞楽は興福寺から奉納された供養舞と考えられています。舞楽は前述したように、古代の朝鮮半島(新羅・百濟・高句麗)及び中国・印度・東南アジアなど大陸方面から伝わった外来の歌舞で、仏教の行事や法要の中で舞楽法要として大きな役割を持っていました。おん祭でも中央の舞台は法筵であり諸芸能の舞台でもあります。そして、舞台の左右に特に大きい鼙太鼓を設け、神仏混肴の考えのなかで興福寺としての最高の敬意をもって舞楽法要の形で行われたと思われます。

最後の二番は勝負舞で、「蘭陵王 らんりょうおう(左)・納曾利 なそり(右)」は競馬、また「抜頭 ばとう(左)・落躰 らくそん(右)」は相撲で、それぞれ左と右の勝者を祝うものとして舞われますが、おん祭の神賑行事つまり法楽にあたるものであります。

なお、「散手 さんじゅ(左)・貴徳 きとく(右)」は興福寺の一条院と大乘院の両門主の中門遷りの舞楽に舞われます。

最後に舞われる「落躰 らくそん」は、枕草子にも「落躰は二人して膝踏み舞いたる」とありますが、二人の舞人が舞台に何度となく膝まづく様は、あたかも敬虔な祈りを捧げ、神前にぬかずくかのように思われます。